

## 「第1回 妊娠出産子育て基本調査・フォローアップ調査 (1歳児期)」から読み取れるもの～調査検討委員会より～

恵泉女学園大学大学院教授 大日向雅美

本調査は、初めての子を持つ夫婦を対象に、妊娠期からのフォローアップを通して、親としてどのように成長し、また夫婦としての関係を築いていくのか、その過程を明らかにしようとする日本でも最初の画期的な試みです。

今回は子どもが1歳児になった親が対象ですが、前回の0歳児期の調査に比べると、全体的に子育ての楽しさが減少し、夫婦間の絆もゆるやかに下降している傾向が印象的です。しかし、これを直ちに子育ての危機とみるのは適切ではないでしょう。むしろ、妊娠中から0歳児期までの子育てライフは、何から何まで初めての経験であり、イベント的な緊張感と高揚感に満ちていたのに対して、子どもが1歳児期になって子育てが日常生活の一部として地歩を固めつつあると考えるべきではないかと思えます。「子育てが楽しいと心から思う」人の割合が減少し、重荷に感じる割合が増加傾向にあります。0歳児期に比べれば、子どもは駄々をこねたり、親の言うことをきかなくなったりするからでしょう。育児の悩みも、トイレトレーニングや言葉の発達・性格などに関するものが増えています。生活リズムの確立や絵本・おもちゃの与え方を悩んでいた0歳児期に比べて、悩みの内容がより複雑化しています。いずれも子どもの成長あつての親の悩みであり、子どもの成長とともに、親も成長していく必要が問われる時期に入っていることが示されていると言えます。

子どもの成長に伴って、親の悩みも多様化することは当然と考えられますが、親が過剰にストレスを強めることのないような対策が必要です。この点に関して、調査結果から考えられることは、ひと言で言えば子育て期の親に対する社会全体の支援の大切さです。

例えば、地域でサポートしてくれる人を多く持っている母親ほど、子育てを重荷に思う割合が少ない傾向が示されています。1歳を過ぎると子どもの行動もいっそう活発になりますので、家の中で母子だけで過ごす生活には無理が少なくありません。できるだけ親子で地域に出かけ、親子ともに行動範囲を広げることができるよう、地域の子育て支援センター等の充実は言うまでもありませんが、地域全体でさりげなく親子を見守り、支援の手を差し伸べる雰囲気醸成が求められています。また、働く母親が育児の悩みを専門職に頼る傾向が示されています。日中働いていることで、地域の人との接点が少なくならざるを得ない生活環境の影響も考えられるのではないのでしょうか。就労家庭に対する地域の支援のあり方も再検討が必要と考えます。一方、夫の場合は子どもと過ごす時間が長くなるほど、子どもとかわる頻度が高く、親子間の愛着関係が育っているという結果に、改めて子育て期の父親の働き方をワークライフバランスの観点から再検討する必要性が考えられます。しかし、父親が育児により多くかわることは子どもへの影響だけでなく、夫婦の絆を確かにする上でも欠かせない要素です。配偶者に対する意識を尋ねた項目で、互いの仕事や悩みに関心を持つ度合いが徐々に減っていることが気がかりです。今後、しつけや教育に関して、さらに手がかかる2歳児期に向かって、子育ての悩みを分かち合いながら夫婦の絆をいっそう確かなものとする環境整備が必要です。そのためにも夫婦ともに、子育てと仕事のバランスを上手にとれる生活への支援が急がれていることを本調査は示していると考えます。



かつては、4人、5人子どもがいる家族はどこにでもいましたが、近年の少子化の進行によって、親の子育て経験が日本全体として減少しています。何人も子育て経験のある親のほうが、子育て経験のない親よりも、子育てに自信がある、と想定するのは自然なことです。すでに子育てを終了した人に、様々な子育て支援活動の担い手になってもらおうという活動が全国で進行中ですが、その根底には子育て経験による学習成果を活用しようという考えがあります。

本調査の結果では、子育てに対する自信の有無で対象者を2群に分けて、その相違に焦点を当てて分析しています。もし、経験が自信を生むのであれば、単純に考えれば、まだ子育ての経験が少なかった0歳児期に比べて、1年子育てを経験した1歳児期のほうが自信がついたはずですが、ところが子育ての悩みのデータにみられるように、1年間の子育て経験は、親の子育てに対する自信の向上にはつながってこないことが明らかになりました。

この結果はどのように解釈すればよいのでしょうか。たぶんいくつかの解釈があると思います。1つ目の解釈は、0歳児と1歳児では、子育てに必要な技術や知識が違うということです。0歳児の経験があっても、それは行動や情動（情緒）面でより発達段階の進んだ1歳児の子育てにそのまま役立つものではないのです。頻度の高い悩みであるトイレトレーニングや言葉の発達は、決して0歳児の子育ての悩みにはならないでしょう。

2つ目の解釈は、子育ての苦労や心配を経験した分だけ、自分たちの子育ての実力をより冷静にみることができるようになり、より厳しい目で自分たちの「自信」を判断することができるようになった、という解釈です。初心者がときに自信過剰に陥ることがあることは、子育てに限らず様々な学習過程にみられる現象です。

そして3つ目の解釈は、子育てへの親和性のような生得的な性質がもともと人にはあり、いくら経験を積んでも親和性そのものは変化しないというものです。すでにそのようなことについて心理学的な研究があるのかもしれませんが、子育て困難への支援を考えるとこの3つ目の解釈の可能性は無視できないと思います。

しかし、今回の調査で、もっとも感銘を受けたのは、この子育ての自信の変化ではなく、「子育てで生活での経験率とストレス」の結果です。子どもの年齢、妻・夫を問わず、もっとも経験の多いストレス場面は「子どもに遊んでとせがまれる」という場面でした。このストレス場面は、もともとヨーロッパで開発されたデイリー・ハッスル（毎日のごたごたといった意味）尺度から選ばれたものであり、ヨーロッパの多くの人がストレスを高く感じる項目です。ところが、結果からわかるように日本の子育て中の親は、「子どもから遊んでとせがまれ」ても、ほとんどイライラしないのです。

この結果だけから断定することはもちろんできませんが、もしかすると、日本人の子どもに対する文化的な親和性の高さを示しているのではないのでしょうか。

江戸時代に日本にきた多くの欧米の研究者（ケンペル、ツンベルグ、モース）が異口同音に「日本人は子どもをかわいがる」「赤ちゃんにとって日本は天国のようなところだ」と書いていますが、この結果がそうした日本人の文化的な伝統が現在も息づいていることの証拠であればと願わずにはられません。



妊娠から出産を経て子どもが1歳のお誕生日を迎えるまでの間は、およそ1年半。夫婦がそれぞれいかにして親になり、どのような心理的变化を経験しているのか。これまでの調査は、子育てのある一時点を取り上げ、主に妻を対象とした断片的な調査がほとんどでした。本調査では、妻だけでなく夫も対象としているだけでなく、同一の夫婦に対して調査を繰り返していることから、過去の回答との比較、夫婦間の比較など、多角的な視点からの分析をした貴重なデータを提供しています。今回の調査結果でもっとも印象に残る結果は、1年間の子どもの成長は喜びであると同時にストレスになっており、それに呼応するように、夫婦の関係性やQOLがゆるやかに下降していることでした。なぜそうなってしまうのでしょうか。

もっとも注目したい点は、1歳児の父親の72.5%が平均実働時間9時間以上、11時間以上の父親も3割を超えるという事実です。しかもこれは通勤時間を除く時間数ですので、父親・夫不在の時間はほとんどの家庭で12時間以上になると思われます。この平均実働時間「11時間」は、非常に重い意味のある数字です。11時間以上働いている父親は子どもとかかわる頻度が少なくなるだけでなく、子育てを楽しみと思えず、子育てのためにいつでも時間に追われて苦しいという気持ちになっています。家事の助け合いは子育て期の母親にはありがたいものですが、労働時間が長ければ、このような助け合いも困難になるでしょう。夫婦関係では、「私と配偶者は幸せな結婚生活を送っていると思う」という結婚観を問う質問では、5割以上の夫婦が「あてはまる」と回答しているものの、生活の中での助け合い、話し合いについて具体的に質問すると、いずれも妊娠期より「あてはまる」という割合は著しく減少しています。

その一方で、子どもの子育てについて相談したり、話し合ったりしている相手は妻、夫とも、「配偶者」が断然多く、次に続く親、友人・知人は半分以下の割合となっています。現代の子育てがいかに孤独なものか、母子保健・小児医療にかかわる医療者として、とても悲しく思います。育児については夫婦はお互いを必要としており、小さな子どもの父親・母親の関係性の維持が重要な課題であることがわかります。

少子化に伴う様々な政策が打ち出されてはいるものの、子育ては未だに妻が主体となって行うほうがよい、という価値観がエビデンスなく継続しているように思えてなりません。そしてそれは父親にとっても大きな負担を与えています。実働時間の長い父親は、子育てを楽しむ時間も少なく、子どもを通じた地域社会とのつながりも母親ほど広がりません。ストレスの高い育児環境では、父親としての自信や満足度が低くなるだけでなく、この時期にもっとも大切な子どもとの愛着形成を困難にしています。

今回も含めたこれまでの調査では、父親の育児能力や育児に対する自信は、子どもとの楽しい時間によって育まれていることが明らかになっています。父親の育児時間は、母親と同じくらい価値あるものとして尊重されるべきです。父親が無理のない労働時間の中で、経済的安定を得られるようにすることは、本当に難しいことなのでしょうか？ 子育て世代の夫婦が、家事・育児を心から楽しむゆとりを持てるように、社会全体で支えていくような政策が求められています。今回の調査結果は、父親の子育て時間を大切に作る政策づくりが、次世代育成に絶大な効果を発揮する可能性を示しています。